

13.

瀬越町の生業の変遷と世帯数、人口の動態(瀬越町)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4889

13. 瀬越町の生業の変遷と世帯数、人口の動態

西川 麦子

- I 20世紀の瀬越町の世帯数と人口の動態
- II 地場産業の欠如と住民の選択
- III 住宅地としての瀬越
- IV 今日の世帯、人口構成

瀬越は、「北前船」によって繁栄していた明治の中ごろまでは、狭い土地に200をこす世帯が居住していた。北前船衰退後は、大正、昭和初期に激しい世帯、人口移動を経験し、今日では世帯数60に満たない小規模な集落となっている。この章では、20世紀以降の瀬越町の生業の変遷、世帯数、人口の動態をおいながら、社会、経済状況の変化と、それにたいする住民の対応をとらえてゆく。

I 20世紀の瀬越町の世帯数と人口の動態

1. 行政区分と「瀬越村」に関する記録、資料

瀬越町は、江戸時代から1889（明治22）年まで、1891年から1954（昭和29）年まで、瀬越という1つの大字が単独村を形成していた（1章、14章参照）。つまり、この時期の「瀬越村」という行政村の単位が、今日の加賀市に属する一町名である「瀬越町」にあたる。現在では、規模の小さな集落ではあるが、瀬越町には、とくに明治から昭和初期にかけての社会、経済状況を知りうる行政資料、北前船、広海家や大家家などに関する資料が、多数保管されている。これは、瀬越村が、単独村であったこと、財政的に豊かであったこと、学校教育に熱心であり、学識者が意識的に記録を作成したこと、などの理由が考えられ、資料の存在自体が、ある時期の瀬越という集落の特徴の一端を表している。本稿では、瀬越町に関する次の5つの統計、文献資料を用いている。

①瀬越尋常小学校「瀬越尋常小学校一覧表」：1873（明治6）年に瀬越村内に設立された瀬越尋常小学校が、各年度ごとに所定用紙1枚に記入して作成したもので、1901年～1936年度、1945年度、1955年度、1960年度、1965年度の記録が残っている。児童数、就学状況の他に、学区域の各集落（1901年～1912年度は、瀬越、永井、他年度は瀬越、上木）について、現住戸数、人口、地価、生業などの事項が記入されている。なお、戦後、瀬越小学校は、1967年に塩屋小学校と合併し、塩屋町に緑が丘小学校として新設された。

②石川県江沼郡瀬越村役場「瀬越村村治一覧表」：瀬越村が毎年作成した統計資料であり、1923年～1926年、1928年～1932年、1935年～1941年の記録がある。本籍人口、出入人口、現住人

口（以上の性別人口）、戸数、1戸あたり平均人口、本籍者の就学状況などが記載されている。

③石川県江沼郡瀬越村役場「石川県江沼郡瀬越村村勢要覧」：同じく瀬越村が作成した統計資料であるが、ここでは、世帯数、人口の他に、年齢別人口、産業別人口、住宅状況などの事項が②よりも詳細に記録されている。1949年、1952年、1953年の3年分の記録があり、瀬越村が大聖寺町に合併される直前の状況を知ることができる。

④上田道太郎編『瀬越村報』第1号～7号、1931年～1937年：当時の村長が編集し、瀬越村が発行した印刷本である。1931年から7年間、村内外の住民、瀬越出身者に向けて、毎年発行された。瀬越村の行政の年間の活動、村外在住の瀬越出身者からの寄付を含めた歳入、歳出の決算、村の近況、自治的組織の活動、住民や瀬越出身者の近況、出生、死亡、就学、就業状況などが、60頁～100頁にわたって報告されている。

⑤大聖寺高等学校郷土研究クラブ『瀬越町の民俗調査』1977年：大聖寺高等学校の生徒によって、1976年に行われた瀬越集落での民俗学調査の報告書。生業、衣食住、社会組織、宗教、儀礼、などについてふれられ、1970年代の瀬越町住民の生活の一端を知ることができるとなる。

2. 20世紀の瀬越の世帯数、人口動態

上述した統計資料①②③と、国勢調査（⑥1965年～1990年）、1995年4月現在の瀬越町区民台帳（⑦）をもとに、1901年以降の瀬越の世帯数、人口を5年ごとに表-1にまとめた。20世紀をとおしてみた瀬越の世帯数、人口については、大きくは次の3つの特徴がみられる。第1に、世帯数、人口の激減、第2に、性別人口比率の不均衡、第3に、世帯規模が小さいことである。

瀬越の世帯数、人口は、20世紀前半、明治期末から昭和期の初めにかけて急激に減少を続けている。1905（明治38）年は、239世帯、954人であったものが、30年後の1935（昭和10）年には、世帯数はほぼ3分の1の80世帯、人口は4分の1近くの263人となっている。その後は、世帯数、人口とも、以前ほどの激しい変動はみられず、終戦後一時的に増加する他は、全体をとおしては緩やかに減少している。1995（平成7）年現在は、世帯数54、人口195人と、今世紀において最小となっている。

性別人口は、20世紀初頭には大きな差はなく女性よりも男性が僅かに多かった。その後、1910年代から今日に至るまで、どの年も男性人口が女性人口よりもかなり少ない。とくに大正期（1910年～20年代）は、全人口にたいする男性住民の割合が少なく4割に満たない年が多い。

世帯規模は、「瀬越尋常小学校一覧表」によると、1900年代から1910年代にかけて男性現住者数が年によって大きく異なり、平均世帯員数も3.03人から6.23人までばらつきがみられる。1920年代以降は、今日に至るまで、平均世帯員数は多くの年が3.5人未満である。とくに1920年代から1930年代初めにかけては、1世帯あたりの人員数は3人に満たない。瀬越では、世帯の極端な小規模化が早くも大正期に生じていたことがわかる。

このような世帯数、人口、性別人口比率、世帯規模の特徴、推移を、前述した資料や現地調査

表一 瀬越の世帯数、人口動態

西暦	元号	世帯数	人口	男	女	平均世帯員数	出典資料
1901	明治34	235	924	471	453	3.93	①
1905	明治38	239	954	484	470	3.99	①
1910	明治43	162	961	496	465	5.03	①
1915	大正4	140	485	144	341	3.46	①
1920	大正9	124	348	131	217	2.81	②
1925	大正14	104	292	106	186	2.81	②
1930	昭和5	98	276	116	160	2.82	②
1935	昭和10	80	263	113	150	3.29	②
1940	昭和15	76	248	97	151	3.26	②
1945	昭和20	77	260	112	148	3.38	③
1950	昭和25	98	371	159	212	3.79	①
1955	昭和30	76	262	105	157	3.45	①
1960	昭和35	80	268			3.35	①
1965	昭和40	70	229	100	129	3.27	⑥
1970	昭和45	71	219	98	121	3.08	⑥
1975	昭和50	70	231	100	131	3.30	⑥
1980	昭和55	64	217	94	123	3.39	⑥
1985	昭和60	61	207	91	116	3.39	⑥
1990	平成2	56	187	79	108	3.34	⑥
1995	平成7	54	195	83	112	3.61	⑦

出典

- ①「瀬越尋常小学校一覧表」
- ②「瀬越村村治一覧表」
- ③「石川県江沼郡瀬越村村勢要覧」
- ⑥「国勢調査」
- ⑦「瀬越町区民台帳」

資料①②③では「戸数」という用語が用いられており、これが国勢調査で扱われている「世帯」と同じ単位であるかどうかは不明である。表1では、とくに区別せずいずれも世帯として扱い数字を記した。また、同じ年の世帯数、人口の統計について、①の「瀬越尋常小学校一覧表」と②の「瀬越村村治一覧表」の数字は必ずしも合致せず、①の数字が、②の前年の数字と同じである場合がいくつかある。②の統計資料をもとに①の資料が作成されたケースが多いのではないかと考えられ、①②の2つの記録がある年は、資料②を用いた。また、資料①の1910年代ころまでの男性の現住人口は、バラツキが大きく、前後の年と30人以上も差がある年もある。実際の人口移動の激しさに加え、村外に長期、短期、不定期に滞在する瀬越本籍者や、村外に本籍をおく瀬越居住者などの統計上の扱いが、一定していなかったのではないかと考えられる。ここでは、瀬越の世帯、人口動態の大きな流れを把握するひとつのめやすとして、これらの資料を参照する。

から知りうる、次の3つの時期についてとくに詳しくみてゆく。Ⅱでは、北前船関連産業が衰退した後、20世紀初頭から1930年代、地場産業が欠如した瀬越における、住民、行政の対応をさぐる。Ⅲは、第2次世界大戦後から1970年代について扱い、終戦後の複雑な世帯の移動、1960年代以降加賀市内での就労機会が増え、郊外の住宅地となってゆく瀬越の移り変わりをおう。そしてⅣでは、それまでの経緯をふまえ現在の瀬越集落の特徴を、世帯、人口構成から考察する。

Ⅱ 地場産業の欠如と住民の選択

北前船の繁栄と衰退は、瀬越住民の生業に大きな影響を与えてきた。1870（明治3）年の記録によると、瀬越村では、12人の住民が計42船の和船を所有し、乗組員総数は547人であった（『瀬越村報』第7号、20～21）。これらの乗組員が全て瀬越の住民とは限らないが、船主など富裕層の家での女子の労働なども含めると、瀬越住民は北前船に関連してじゅうぶんな雇用の機会に恵まれていた。しかし北前船による海運業が衰退してゆくと、^{おおいえ}大家家、^{ひろろ}広海家は事業の根拠地を関西に移し、和船から蒸気船へ切り替え事業を拡大し成功したが、その他の住民の多くは、新たな収入手段の模索を余儀なくされた。

瀬越尋常小学校一覧表の生業の項目には、瀬越は、1901（明治34）年から1912（明治45）年は、「航海業兼商農業」とのみ記され、1913（大正2）年～1917（大正6）年には、船乗業20%、商業60%、農業20%と記入されている。その後は、航海業、船乗業といった記載はみられない。1920年代半ばまでは自由業（年によって「会社」と併記され一括して扱われている）が40%～60%という高い比率を占め、農業（10%台）、商業（20%台）、無職（10%台）が一定の比率を保ち、残りは工業、漁業、その他が記されている。同表に記載されている他の集落の生業については、永井は農業のみ、上木は、1930年代半ばまでほとんどの年は、農業90%、工業10%である。周辺集落は農業を第一の産業として安定していたが、瀬越は耕地面積は少なく、また砂地で、水も深い。住民が農業にのみ依拠して生活することはできなかった。

明治期の終わりから大正期にかけて、農業を副業としながら、それぞれの世帯が多様な収入手段を試みるが、瀬越住民の生活の基盤となるような産業はみられない。この時期は、20世紀の瀬越において世帯、人口の流出が最も激しく、世帯数は半減、人口は3分の1ほどに減少した。

昭和初期の瀬越における主なる産業の欠如は、『瀬越村報』のなかで強調されている。『村報』の発刊の意図は、瀬越村在住者側が、村外の瀬越出身者に瀬越の現状を訴え支援をえることにあった。当時の瀬越村が抱える「悩み」とは、「第1に有力なる産業の無き事、第2に漸次戸数人口が減少する事」である。村内には住民が生活してゆくだけのじゅうぶんな産業がなく、若者の新たな就職口もない。世帯、人口は流出し、このままでは瀬越村の将来が危ぶまれた。何らかの対策をとるためには、村外の瀬越出身者の一層の協力が必要である、といった訴えが全号をとおして繰り返されている。

また、『村報』では、世帯数、人口の動向を具体的な数字をあげて提示し、瀬越在住者、出身者の住所、職業について詳細な情報を提供している。村報によると、「瀬越村民」（ここでいう「村民」とは、村報には明記されていないが、「瀬越村在籍者」を意味していると思われる）は、表-2のように全国に分布している。たとえば1935（昭和10）年については、瀬越在住世帯80、人口男性113人、女性150人であるのに対して、在外村民は同年6月1日現在、230世帯、人口は12月30日現在、男性325人、女性291人である。在外者の居住地は、樺太、北海道、大阪府、兵庫県など、かつて北前船と関係が深かった地域が、全体の半数以上（148戸）を占め、その他に石川県内、東京府が多い。また、村報で毎号報告されている「瀬越村在籍者、出身者の活動状況」によると、郡部ではなく小樽市、大阪市、といった都市に住み、自営業者（製造、商業、会社経営など）や賃金労働者（店員、会社員、行員など）として働いている。

瀬越村は、村外に住む瀬越村在籍者の税金が村に還付されることによって、豊かな財源を維持することができた。そして、住民の教育、小学校新築、病院設立、火葬場建設、橋や道路の整備など、資金を必要とする行事、活動、事業には、在外者からの多額の寄付が供された。財政面においては、在外者との関係に大きく依存してはいたが、瀬越村自体も、今日で言う「村おこし」

表-2 瀬越村民全国分布

区 分	戸 数 1933. 6. 1 *1	戸 数 1935. 6. 1 *2	人 口 1935. 12. 30 *3		
			男	女	計
樺 太	19戸	24戸	26人	23人	49人
北 海 道	54戸	59戸	83人	60人	143人
東 京 府	16戸	16戸	27人	18人	45人
神 奈 川 県	1戸	1戸			
群 馬 県	1戸	1戸			
福 島 県		1戸	1人	0人	1人
石 川 県	31戸	33戸	33人	39人	72人
福 井 県	2戸	3戸	2人	0人	2人
山 梨 県	1戸	1戸			
静 岡 県	1戸	1戸	4人	3人	7人
愛 知 県	3戸	3戸	6人	4人	10人
京 都 府	4戸	4戸	15人	13人	28人
大 阪 府	44戸	44戸	75人	67人	142人
兵 庫 県	20戸	21戸	30人	30人	60人
広 島 県	1戸	1戸	0人	1人	1人
福 岡 県	6戸	6戸	9人	13人	22人
鹿 児 島 県	1戸	1戸			
朝 鮮		1戸			
台 湾	4戸	4戸	8人	8人	16人
満 州	3戸	5戸	3人	6人	9人
関 東 州			3人	6人	9人
計	212戸	230戸	325人	291人	616人
瀬越在住者			113人	150人	263人
総 計			438人	441人	879人

* 1 『瀬越村報』第3号、77~78

* 2 『瀬越村報』第5号、3~4

* 3 『瀬越村報』第6号、表紙

と教育に関連している。

村報の発行は、瀬越出身者との緊密な関係を維持し就職への協力を求める1つの手段であった。瀬越在住者と村外在住者との関係は、次の「就職斡旋の依頼」によく示されている。「就職其他職場の御指導援助に就いては毎年御願致しました。爾来前各項に近況を記載致しました通で之以上の仕事は瀬越村に居てはあり得ない。昔から本村は先輩が採られていた様に村は安住の墳墓の地として居住者丈で小なりと唯出来得るだけの仕事をして之を維持し青壮年層は外界に職を求め

となる産業がないものか、梅干作り、養蚕、養鶏、養狸などを試みている。また、吉崎御坊への参詣者をめあてに、「江沼郡観光協会に加入し郡内名所旧蹟温泉各地を連絡して観光コースを編成し遊覧の便を計ること」(『瀬越村報』第4号、3)といった観光開発の構想もたてていた。

各世帯レベルにおいては、世帯員の一部、とくに男性を都市に送りだし彼らからの仕送りが家計を大きく支えた。青年層の場合、都市においてよりよい就職をえるためには、学歴と人脈が重要となる。子供の教育には、村も住民も早くから重点をおいてきたようである。村報(第5号、76~77)には、「吾村の誇り」として愛郷心が篤く転籍者少ない、納税額が多く完納している、など7点をあげているが、そのうち2点は、学齢児童不就学者がいないこと、人口の割合にして高学歴者が多いこと、

て活動するより外はない。然るに村の工場は一昨年之を閉鎖して今に代るべき仕事も見出されず、女子は職を失いてより労銀を得るの途がない。他の青壮年者と共に無為に暮す者が割合に多いので困て居る次第であります。」(『瀬越村報』第3号、79)

瀬越戸籍者の納税金額が多額であることから、その還付金によって行政村としては経済的に潤っていた。しかし、自らを「墳墓の地」と称し、産業はなく人口は減少の一途をたどっていた。行政が在外者に瀬越住民の各種学校卒業者の就業状況を知らせ、就職の斡旋を呼びかけなければならぬという、「過疎化」の問題に直面していたのである。その後、瀬越の世帯数は、1940年代までに70世帯台にまで減少する。

Ⅲ 住宅地としての瀬越

第2次世界大戦後は、数年間は瀬越の世帯数、人口は大きく変動する。1945年には77世帯、260人であったものが、海外からの引き揚げや都会からの転入によって、1948年に109世帯、386人へと大幅に増加した。しかし、1948年に福井大地震、1950年のジェーン台風などの災害に見舞われたことも影響してか、1950年には98世帯、371人に減少し、さらに1955年には76世帯262人と、10年前とほぼ同規模の集落に戻った。

「瀬越村村治一覽」によると、住宅状況は1948年現在では、住宅数97戸のうち持家73戸、借家24戸であるが、1950年には、住宅数98戸のうち、持家77戸、借家18戸、間借3戸となり、持家が増加している。また、1951年版の統計によると、戦後滅失した住宅は14戸、戦後建築された住宅は20戸(うち14戸が1948年8月1日以降建築)である。戦後から1950年代にかけては、一時的に瀬越に居住していた世帯、転入後瀬越に家をたて定住した世帯、戦後になって転出した世帯、後継者が在村せず絶えた世帯、など世帯数の統計上の変動が示す以上に、複雑な世帯の移動があったものと思われる。

性別人口は、1948年、1950年、1951年、1952年のいずれの年も、男性人口が女性人口を大きく下まわっている。年齢層別・性別人口構成について、1950年についてもう少し詳しくみてゆく(表-3)。人口371人(男性159人、女性212人)のうち、0~14歳までは、男性76人、女性54人と、女性の方が少ない。ところが15歳以上については、男性は極端に少なく、男性83人、女性158人である。中学、高校を卒業した女性を含む青年層が、就学、進学を機に村を離れるケースや、

表-3 年齢層別人口(1950.10.1)

年齢	0~4	5~9	10~14	15~19	20~24	25~59	60~	総数
男	28	25	23	11	4	56	12	159
女	16	25	13	16	15	84	43	212
総数	44	50	36	27	19	140	55	371

成人男性が、家族を瀬越に残して長期、短期に出稼ぎにゆくケースが、戦後もかなり多かったと思われる。

「石川県江沼郡瀬越村村勢要覽」1953年度より作成

統計資料をみる限りで

は、安定した地場産業の発展はみられない。農業に関しては、1950年の農家数は38世帯であり、集落の世帯数全体の4割近くを占める。しかし、専業農家は6世帯にすぎず、残りは第1種兼業4世帯、第2種兼業28世帯である。また農家の経営規模は小さく、1世帯あたりの耕地面積は、田3.8反、畑0.3反である。同じ年の農業従事者数は、就業人口の半数以上を占めている。

1952年には農業従事者は4割を割り、製造工業、商業、サービス業などの第2次、第3次産業従事者の比率が増加している。同年、瀬越村内には3つの工場（食料品工場：従事者1人、紡績工場：従事者9人、衣服身廻品工場：従事者2人）、7つの店舗（各種小売業2：従事者4人、専門小売業4：従事者7人、製造小売業1：従事者1人）がある。94世帯の集落において、10に及ぶ工場、店舗が存在してはいるが、いずれも規模は小さく、7店舗のうち6店舗は、「常用労働者のいないもの」と記されている。なお、戦前から構想をたてていた観光開発は、1947年の事故で巡航船そのものが廃止され、実現をみなかった。

行政村としての瀬越村は、戦争の被害と財閥解体など戦後の体制の変化によって、大家家、広海家や、都市に在住する多数の瀬越出身者も打撃を受け、かつてと同じように村外の瀬越出身者に経済的な支援を期待することは難しくなっていた。瀬越村は、単独村による経営が困難となり、1954年には大聖寺町に合併吸収された。

1960年代以降は、国勢調査によると、1960年80世帯から1965年に70世帯に減少した後は、1970年代まで世帯数はほぼ一定している。住民の話では、1960年頃までは瀬越に町営住宅があり、瀬越に転入しやすい状況であったらしい。1960年代前半の世帯数の減少は、町営住宅がなくなったことによるのではないと思われる。

生業については、1960年の農家数は、農業センサスによると36世帯、1950年よりも2世帯減少しているが、その間の集落全体の戸数が大きく減少したので農家率は高くなっている。1970年には、専業は2世帯のみだが、それでも集落全体の3分の1が農業に携わっている。そして1980年代以降は、農家数が数軒にまで減少し、農業センサスにも数が記載されなくなっている（1章参照）。

農業の内容も大きく変化した。『瀬越町の民俗調査』に、1936年、1940年、1949年、1952年、1975年の、主要農産物（米、麦、甘藷、馬鈴薯、大豆、小豆、大根、茄子）、果樹（梅、柿）、養蚕、畜産（牛、鶏、家兎）、水産（川〔鯉、鰻、鮒〕、海〔鯛〕）、という各項目の作付面積、収穫量が、1つの表にまとめられている。1952年までは、米作を中心としながらも、これらの数多くの項目が示すとおり、小規模ではあるが畑作、畜産（主に鶏）、水産（主に川での漁業）を手がけていた。ところが、1970年には、米作409アール、馬鈴薯2アール、大根7アール、以外はすべての項目が「なし」となっている。

1860年代から1970年代にかけては、大聖寺町周辺の機械、繊維工場が増え、雇用機会が多くなり、また道路事情が改善され、自家用車の普及にともなって通勤圏も拡大していった。瀬越から

も加賀市内の広域への通勤が可能となった。『瀬越町の民俗』(7)には、1976年現在の瀬越町の状況を、「空気がよい、景色がよい、雪も少ない、交通が便利になった今日、自動車をもったサラリーマンが新たに住宅を持つようになり、近年徐々に人口が増えつつある」と記されている。

1970年代に統計上は安定していた瀬越の世帯数は、1980年代に入ると再び減少し60世帯代となっている。しかし、とくに1980年代以降に挙家離村が増えたという話は、調査のなかでは聞かれなかった。後継者が瀬越に戻らず絶家したケースが相当数あったのではないかと考えられる。

IV 今日の世帯、人口構成

今日の瀬越町は、新旧の要素をおりませた景観をもつ川沿いの閑静な住宅地となっている。集落内は、家と家とのあいだの空き地が目立つ。転出した世帯が所有する宅地を、近所の人が借りて家庭菜園として利用していたり、放置されたまま雑草が生い茂っている。家並は、大家家の屋敷の一部、狭い道路、その脇の少し傾いた蔵や、大聖寺川壁の石垣など、昔の瀬越町の風情を残す一方で、洋風の別荘地や、新築されたばかりの住居もある。

広い墓地は、転出世帯の墓が大半を占め、瀬越在住世帯が所有する墓は割合としては少ない。その他、寺院、神社、公民館、そして加賀市営キャンプ場と昔の瀬越小学校校舎を利用した加賀市青年の家などがあるが、かつてのように郵便局、病院、小学校といった公共施設や、食料品、雑貨店といった店舗はなく、食堂や旅館もない。

1996年8月現在では、瀬越町会に属する世帯数は56である。人口は、1996年4月現在の「瀬越町区民台帳」によると、瀬越に転入して間もなく詳細が記録されていない1世帯を除く55世帯について、男79人(41.4%)、女112人(58.6%)、計191人、平均世帯員数は3.47人である。

集落の世帯構成の大きな特徴は、瀬越出身ではない転入世帯が世帯数全体の4割近くを占めることである。56世帯のうち、北前船が繁栄していた明治期には瀬越に居住していたのは33世帯、残り23世帯は、他地から瀬越へ転入した。この他、町会には属していないが、瀬越町内に別荘を所有し、週末や休暇にこれを利用するという世帯も2ある。転入世帯23のうち4世帯は、転入時期を知ることができなかった。残り19世帯と別荘を所有する2世帯をあわせた21世帯のうち、15世帯までが1960年代以降に転入した。

瀬越住民の話でも、「戦後、減少続けていた世帯数が一度底をつき、周辺集落に比べて土地の値段も安いというので、ヨソの人が瀬越に転入するケースがみられるようになった」という。不在地主の土地は、所有者の世代がかわり複数の相続人が全国に分散するなどして、購入のための交渉、手続きが複雑な場合がある。しかし、土地、家賃が周辺集落に比べて安く、また川と海に囲まれた自然環境、静かで落ち着いた印象を与える集落の外観もプラスに評価され、不動産、住宅情報誌をとおして情報をえて、瀬越に持家、別荘、借家を求める世帯がとくに1990年代に入って増えている。

世帯形態については、1996年8月現在の調査で知ることができた55世帯については、単身世帯9、夫婦世帯10、異なる世代からなる2人暮らし世帯5、その他の核家族世帯13、3世代以上同居の拡大家族世帯18、である。

単身、夫婦世帯のうち2世帯は世帯員の年齢は40歳未満であるが、残り17世帯は、後継者が転出した平均年齢69.3歳の高齢者世帯である。異なる世代からなる2人暮らしは、下の世代はいずれも成人している。核家族世帯、拡大家族世帯のうち半数は、最も若い世代が成人しているが未婚である。20歳代後半から40歳代にかけての未婚の子供を含む世帯が、瀬越では以前より増えているようである。未成年の子供を養育中の世帯は、瀬越集落全体の4分の1ほどにすぎない。

55世帯191人の年齢層別・性別人口構成(表-4)は、次のように大きく4つに区分すると、その特徴がわかりやすい。0~19歳は男15人、女20人、20~34歳は男10人、女24人、35~64歳は男36人、女38人、65歳以上は男18人、女30人である。今日の瀬越の男女の人口差の最も大きな要因は、平均寿命の性差と、就学、就職を機に転出する男性住民が多いことによる。かつてのよう

表-4 年齢層別人口(1996.4.1)

年齢	0 ~4	5 ~9	10 ~14	15 ~19	20 ~24	25 ~29	30 ~34	35 ~39	40 ~44	45 ~49	50 ~54	55 ~59	60 ~64	65~	計
男	2	3	6	4	7	1	2	6	6	8	6	5	5	18	79
女	2	10	6	2	12	8	4	7	6	7	7	6	5	30	112
総数	4	13	12	6	19	9	6	13	12	15	13	11	10	48	191

「瀬越町区民台帳」1996年度より作成

な壮年層の短期、長期の出稼ぎは、今日の瀬越ではみられない。女性の場合は、20歳代後半から30歳代前半にかけての人口は、男性ほど極端には少なくなっていない。これは、現在の瀬越出身の女性は、生家から通勤できる距離に就職するケースが男性より多く、また結婚年齢が高くなり就職後、生家に居住する年数が以前より長くなったこと、その一方で、瀬越外出身の女性が結婚を機に瀬越出身の配偶者の生家に転入し、かつ妻が夫よりも年齢が若い場合が多いこと、などによる。

1996年現在の瀬越在住者の生業は、常勤、パートタイムなどの就労形態の違いはあるが、就労者の大多数が加賀市内に通勤する賃金労働者である。職種は、機械、繊維工場勤務や観光産業関連のサービス業、あるいは学校、役場、病院の職員や、その他の会社員など様々である。個人が希望する条件にあった就職があるかどうかは別にして、瀬越から通勤可能な範囲内で何らかの雇用はある。地場産業の欠如ゆえに多数の世帯、住民が瀬越外に流出せざるをえなかった時代とは異なり、瀬越に在住するか転出するかは、各世帯の事情、個々の住民の、就学、就職、結婚などについての価値観、選択によって多様化している。

20世紀の瀬越は、生業の変遷とともに、大きな世帯、人口の変動を経験してきた。20世紀初頭

には瀬越には200をこす世帯と900人をこす人口が瀬越に居住していた。その人口が激しく流出する20世紀前半においては、集落の小規模化は瀬越の将来を危ぶむ問題と考えられていた。集落在住者は、瀬越出身者の「愛郷心」に訴え、集落外に住む（元）村人との繋がりに大きく依存して生活を営んできた。

瀬越の人口はその後も緩やかに減少を続け、1990年代には、世帯数は50台、人口も200人を割った。今世紀最小の集落規模となったが、今日の瀬越では、人々の話のなかからは、住民が瀬越の現在や将来にたいして大きな不安を抱いているという印象を、私は受けなかった。

それは、瀬越の生活環境が大きく変化したことと、瀬越の住民構成が複雑になっていることによるのではないかと思う。現在の瀬越では、住民それぞれが瀬越から通勤できる適当な距離内に就職し、各世帯は一応の収入手段を確保している。日常生活においては、集落内に店舗や郵便局もないといった不便はあるけれども、自家用車さえあれば、大聖寺町など地域の各地との往来は容易である。人々の経済的、社会的な基盤は地域との関係のなかにあり、瀬越は宅地として快適でありさえすれば、集落全体の人口の増減や集落規模は、個々の世帯、住民にとっては、現在のところそれほど大きな問題とはなっていない。

また、瀬越は、瀬越出身世帯、持家所有の転入世帯、借家居住の転入世帯、別荘滞在型世帯、など様々であり、各世帯、住民それぞれの、瀬越との関わり方の経緯は一樣ではない。長年の体験をとおして育んできたような住民どうしの連体感が、既存のものとしてあるわけではない。住民の構成が多様化したことによって、瀬越出身世帯が多数を占めていた時代に比べると、住民が共通した問題意識をもちにくい状況にある。瀬越住民のなかには、日常生活にとくに支障がなければ、住民全体が瀬越の現在や将来について考えたり、特別な取り組みをする必然性をあまり感じない、という人も多いのではないだろうか。

住民の話のなかでも、瀬越住民どうしの、適当に距離をおいた「都会的」な付き合い方を、瀬越の住みやすさと感じている人もいる。その一方で、集落の「まとまり」に欠けていることを懸念する声も聞かれる。瀬越を共有の生活の場、一つ社会としてとらえ、意識し問題化してゆくこうとするその試みが、夏の納涼祭といった新しい催物の実施であったり、一部の住民を中心とした「瀬越町活性化構想」（18、19章参照）の呼びかけに、表われているのではないかと思う。今日の瀬越は、多様な世帯からなる住宅地となった。そのなかで瀬越住民であること、瀬越に住むことの意味を、そこに住む人々自身が改めて問い始めている。